
自衛隊クーデター～新生日本の聖戦～

0 0 7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自衛隊クーデター〜新生日本の聖戦〜

【Nコード】

N5128N

【作者名】

007

【あらすじ】

2016年4月1日に起こった中国のバブル崩壊は、瞬く間に全世界へ波及。世界経済は大混乱となり、当事国の中国は国民の不满を外へ向けようとした。いわゆる『大中華帝國復古宣言』であり『領土回復計画』である。大中華帝國はシベリア地方・朝鮮半島・インドシナ半島・マレー半島・インド半島、そして尖閣諸島・沖縄へ侵攻・占領した。この事態に日本国民は立ち上がり、防衛出動を命じなかった民自党・民政党の大連立政権打倒を叫びながら、反政府デモを開始した。デモ開始から1週間後、遂に自衛隊が賛同。軍事

クーデターを決行した。

プロローグ

『時間の流れと言うのは一つでは無い。そう、川を考えてもらえば分かりやすい。本流から枝分かれして数多の流れがある。時間の流れもそうだ。本流があればその中から少し違う歴史の動きがあれば、其処からは流れが変わる。パラレルワールド（多次元宇宙）である。時間の流れは一つに非ず。この宇宙にはあらゆる可能性を秘めた時間軸が存在し、それは他の時間軸と相反する流れを持つ物もある。しかしそれは誰にも立証出来ない。私もパラレルワールドを見たことが無い。だが歴史は一つでは無い事だけは断言出来る。もしかすると私達の生きている世界・時間も誰か分からないが、私達には想像できない技術力を有した誰かに管理されているかもしれない。そう、この宇宙を管理する「生命体の管理者」が……』

永江美沙子著

『宇宙の真理』より抜粋

2016年～2018年（前書き）

長らくお待たせいたしました。

2016年～2018年

2016年4月1日

中国のバブル経済がついに崩壊した。

『後に解明した事であるが、バブル崩壊は当時の中国人民銀行・中国政府が行った自殺行為であった。否、こう書けば誤解を招こう。わざとバブルを崩壊させたのである。アメリカ合衆国を抜き去り世界一の経済大国となった中国は、尋常成らざる異常な経済成長から「安定成長」へと中国政府は舵を切った。中国政府も闇雲にバブル経済を崩壊させた訳ではない。我が祖国日本のバブル経済・バブル崩壊・失われた20年、この一連の流れを国家政策として調べあげた。バブル崩壊は日銀や大蔵省による政策転換が原因となり、更にその後の政府による景気刺激策が中途半端であった事。大きく分ければこの2つが理由であると、中国政府は結論付けた。そこで中国政府はバブル経済を崩壊させる前提で、景気刺激策を計画し特別枠で予算を計上した。まさに共産主義国家ならではの経済政策であった。しかしバブル経済からバブル崩壊への流れは、泡が**バブル**一瞬で割れるように一瞬にして経済が崩壊する訳ではない。事実、日本では東京で地価が下がり始めても大阪では、地価は上昇・横這いで「時差」があった。バブル経済の崩壊が始まった出発点はバブル崩壊後に、遡って漸く決められた。バブル崩壊は一瞬では無く、数年間を有して崩れさって行くものなのだ。だが中国は先に述べた通り、共産主義国家である。共産党の意思で経済は決められる。GDPでアメリカ合衆国を抜き世界一の経済大国となった中国に、世界経済は動かされていた。その中国が経済を壊滅させた理由は、今になれば良く

分かる。「世界征服」がその答えであった。』

津田悦子著

『国家経済』より抜粋

一瞬で巻き起こった『世界経済壊滅の嵐』は、対中貿易で経済を建て直した日本を直撃した。漸く2年前に政権与党へ返り咲いた民自党は、連立政権を組む光明党と対策に迫られた。野党は早期の経済対策を行うべきだと追及した。その急先鋒にたったのはやはり民政党であった。しかし日本政治の欠点である選挙ばかりを見据えた短期的な対策しか行われなかった。この対策に当然ながら国民は不満の声をあげた。中国のバブル崩壊から半年後、10月1日には内閣支持率は30%を割った。この事態に遂に民自党は大きな決断を下した。

民政党との大連立政権樹立であった。

2016年11月8日

後の歴史研究家はこの日を『日本政治転換日』と名付けた。それもそうだろう。日本の2大政党である民自党と民政党が大連立政権を樹立したからである。

『大連立政権樹立は民自党の大きな決断であった。民自党は民政党に財務大臣や経済産業大臣・厚生労働大臣の重要ポストを提示した。そしてさらに民政党の考える法案をできる限り成立させる、との事であった。これほどの厚遇に民政党が無関心な訳が無い。民政党は党役員会議で議論を交わし、大連立政権樹立への道を選んだ。そして2016年11月5日。正式に民自党へ大連立参加を発表。光明党もそれを支持し、「大連立プラス光明党による与党支援」と言う青写真が描かれた。その青写真が遂に11月8日に、実現した。衆議院・参議院で過半数を遥かに凌ぎ、憲法改正のハードルである「3分の2」へは若干数足りない（民政党はその点で先手を打った。数名に離党勧告を突き付けたのである。愛人スキャンダルを民政党本部が女性を送り込んで、わざわざ作り上げたのだ。）が、それでも最大級の人員を誇る大連立政権の誕生であった。』

吉村智恵美著

『大連立！！日本政治を再建せよ』より抜粋

2016年11月9日

大連立政権誕生から一夜明けた。新内閣も皇居で任命式を終え、成立した。

『大連立政権は国民に冷ややかに迎えられた。『招かれざる客』と書けば分かりやすいだろう。マスメディアは「大政翼賛会の復活」と報じ、光明党の支持母体である創新学会名誉会長は「戦争内閣」と言い切った。内閣支持率も僅か35%で、発足当初から最悪の数

字を叩き出した。この事態に民自党・民政党・光明党は焦った。国家多難の時期にこの支持率を出した大連立政権の行く末を暗示するかのような事態である。野党第一党となった国家新党は、「政権の方向性が見えない」と一刀両断した。確かに大連立政権は一夜明けでも、未だに明確な公約を表明していなかった。しかも景気はドン底のままである。其処で大連立政権は、大規模な景気刺激策を立案し始めた。その内容は過去最大のものであった……」

大橋恵美著

『日本の歴史〜混迷編〜』より抜粋

『大連立政権が発表した景気刺激策は、余りにも壮大な内容であった。参考にしたのはアメリカ合衆国の「ニューディール政策」であり、方針は大体似たり寄ったりだったが規模が日本の歴史で最大となった。まず最大の目玉政策が、「耕作放棄地40万ヘクタールで国営のオーランチョキトリウム栽培施設を建設する」であった。オーランチョキトリウムとは一言で言えば、「石油を作る藻」である。2万ヘクタールで日本の年間石油消費量を賄えるほどの石油が精製出来る。もともと筑波大学の教授が2010年に発表したものであるが、その時日本政府は全く相手にしなかった。しかし国民の心が離れている現状で、大連立政権は国民を引き付ける魅力が欲しかった。その魅力にオーランチョキトリウムは十分過ぎた。2万ヘクタールで日本の年間石油消費量を賄えるのである。耕作放棄地40万ヘクタール全てでオーランチョキトリウムを栽培すれば、日本は「石油輸入国」から「石油輸出国」に変貌出来る。魅力過ぎた。日本の技術力からすれば栽培から精製は容易であった。このオーランチョキトリウム栽培の他に、軍備増強・公共事業増大・農業発展大ま

かに言えばこの3つも同時に行われる。軍備増強はこう書けば物々しいが、「国産戦闘機開発」と「空母建造」の2つである。国産戦闘機開発は細々と続けられている実証検証機「心神」を実用機にする内容となる。空母建造は22DDHやましる級の後継艦として、そして中国の空母建造に対抗して建造される。中国は通常空母を既に4隻保有し、原子力空母を2隻建造中である。亜細亜の軍事バランスを均衡にする為に2年の予定で2隻を建造する。しかも心神を艦上機とする予定である。所謂海空共有機として実用しようとの考えであり、早期実用化が求められた。公共事業増大は軍備増強と平行して行われる。軍備増強は公共事業として軍需産業に発注され、建造を開始する。その他に高速道路建設や全国的な都市近代化、かつて中田栄角総理が行った「日本列島改造」の現代版と言える。狂乱物価対策も行いつつ、根本的な日本の発展を行う決断をした。農業発展は基礎から叩き直し、農地統一による大規模農場へ集約する事を考えた。一種の会社として農業を変えるのである。日本の根本的な改革を行う景気刺激策であった。」

中崎由美恵著

『日本維新』より抜粋

2017年1月

大連立政権の提出した景気刺激策は、賛成多数で可決。そして今年になり、漸く動き始めた。

『「根本的に日本が変わった。」日本人の誰もが口を揃え、こう言

った。耕作放棄地には経済産業省主催の入札を行い、建設業界はその大半がオーランチョキトリウム栽培施設建設：それに先立つ経済産業省会議室を利用した実験では精製に成功した：に関わった。だが耕作放棄地は一ヶ所に集まっている訳では無い。その為耕作放棄地を利用したオーランチョキトリウム栽培施設は、大きさがバラバラの物となった。しかし石油が生産出来る事に変わりは無く、半年後には輸出の目処が経った。此れにより埋蔵量を気にする事が無い、油田が日本に出現した事になる。国内は俄かに活気に満ち溢れた。政府は将来的な消費税やガソリン税の廃止・所得税や法人税等々の大幅引き下げ・高速道路無料化・年金支給額の3割増・公立私立小中高校大学の無料化・医療費の無料化・JR再国有化による鉄道の無料化を発表。此迄の国民が危惧していた問題が一気に解決した事になる。学校機関は教職員はそのままに私立も公立化させ、幼稚園や保育園も国立として建設する。こうする事で待機児童の問題も無くそうなのである。この財源の裏付けは、藻から作られる石油が売れる前提で進められた。』

大道ユエミ著

『日本革命』より抜粋

『自衛隊の強化も、同時に進められた。だが自衛隊の装備を語る前に、中国軍の説明をしよう。中国軍はもはや自衛隊を抜き去り、亜細亜最強の軍備を保有している。陸軍は主力の99改式戦車を筆頭に、強大な機甲師団が編成されている。かつて人海戦術を得意とした軍とは思えないほどの近代化・強大化を成し遂げた。空軍も第5世代戦闘機をアメリカ合衆国・ロシア連邦に次いで取得。F-22・T-50・J-20は第5世代戦闘機の代名詞となった。しかも中国空軍のJ-20は米露の第5世代戦闘機よりも桁違いに多かった。

そして何より、海軍が厄介である。通常空母を既に4隻保有する中国海軍は、原子力空母の建造まで開始した。通常空母は満載排水量6万トンと7万3000の2隻ずつでロシア海軍のアドミラルクズネツォフを凌ぐ規模を誇る。そして中華イージスを12隻保有しており、海軍戦力に於いても日本を凌駕した。

この中国軍に対抗する必要が自衛隊に生じた。その為大連立政権は、景気刺激策の一環として軍備増強を発表した。勿論憲法は変わらなかったが……。しかし自衛隊の規模は大きく様変わりした。陸上自衛隊はゲリコマ対策を主眼に置きながらも、機甲車輛の増大が行われた。中国軍は海軍の揚陸艦を増産しており、上陸してこないと言い切れない。戦車を主力に開発が進められた。航空自衛隊は実証検証機心神で得られた技術を取り入れ、第5世代戦闘機開発を進めた。これは海上自衛隊の空母にも搭載される事が決まった。更に輸送機と給油機の増産が決定した。海上自衛隊は22DDHやましる級の後継艦として、本格的な6万トン級空母の建造が決まった。此れはアングルドデッキと蒸気カタパルトを装備した純粹空母である。この2つはアメリカ合衆国海軍に技術提供を求めた。アメリカとしては出すのを渋ったが、世界的に空母が建造されている中で日本の提案を無視する訳にはいかない。原子力空母はアメリカを筆頭にフランス・ロシアが保有しており、中国・インド・イギリスが建造中である。通常空母はイギリス・フランス・ロシア・インド・スペイン・イタリア・オーストラリア・タイ・ブラジルが保有しており、オランダ・カナダそして日本が建造中である。海上自衛隊初の本格的空母と言われた22DDHやましる級は、結局は「ヘリコプター空母揚陸艦」とでも言うべき代物となった。しかし此れでは駄目だと言う事、6万トン級の本格的空母が建造されたのである。そして自衛隊の装備強化は順調に推し進められた。』

細内楓著

『自衛隊装備年鑑を解りやすく解説』より抜粋

2017年11月5日

この日は世界にとって忘れられない日となった。中国が「大中華帝國」宣言を行ったのである。国民の不満を外に向ける口実とはいえ、帝國主義を復活させるとは世界中の誰もが驚いた。しかし世界は大中華帝國の行動に、再び驚かせた。

11月28日

大中華帝國は突如として、北朝鮮への侵攻を開始した。この行動に世界は凍り付いた。何が起きたのか理解出来なかった。アメリカは事実関係をCIAに調べさせた。世界がただ事実関係を調べているだけに終わった3日間で、北朝鮮は大中華帝國に占領された。ここで大中華帝國は世界に「領土回復計画」を発表。世界は再び凍り付いた……

『領土回復計画』一言で言えば領土を阿片戦争以前の規模に戻すと言うものである。朝鮮半島は実力を見せ付ける為に侵攻したと言わ

れている。ここで驚くべき事に、アメリカは在韓米軍の総引き揚げを行った。後に分かった事だが、大中華帝國はアメリカを恐喝したのである。「世界の警察」と言う看板を下ろせ、米軍基地を引き揚げろ、もし反対すれば核攻撃を行う、核戦争になろうが我が国は人口が減ってちょうど良い。アメリカはこの恐喝に折れたのである。誰も他国を助ける為に、自国が核攻撃を受けるのを許す訳が無い。それにアメリカ史上初の女性大統領となったクレアは、モンロー主義の復活を明言していた。クレア大統領は海外に展開する米軍基地の総引き揚げを命令した。それは在日米軍も例外では無く、日米安保条約も破棄されたのである。』

小道幸子著

『第二次大東亜戦争』より抜粋

2018年3月7日

大連立政権は窮地に陥っていた。反政府デモが発生してから1週間が経過した。

『大中華帝國は領土回復計画を宣言してから東亜細亜各国に宣戦布告を行った。2018年1月には大中華帝國は韓国・シベリア地方・インドシナ半島・マレー半島・インド半島へ侵攻。陸海空の三軍は協同で驚異的な速度で領土を回復させた。占領された国の統治者達は、日本やオーストラリアへ亡命した。そして2月20日には大中華帝國は尖閣諸島と琉球列島へ、その牙を向けた。空母4隻を主力とする海軍に海上保安庁の巡視船は粉碎された。しかし日本政府は自衛隊に防衛出動を命じなかった。日本政府にも大中華帝國は核攻

撃の恐喝を行った。尖閣諸島と琉球列島を占領させてくれれば何もしない、だが自衛隊を出動させれば主要都市全てに核攻撃を行う。この恐喝に政府はおとなしくするしかなかった。核兵器を保有しない日本としては手も足も出なかった。だがそんな理由で国民が納得する訳が無い。国民は地方から反政府の声を上げた。それは日数が経過するに連れて激しさを増した。そして遂に3月1日には反政府デモが全国規模で発生した。そして不満を溜め込んでいた自衛隊が国民側に付き、反政府行動を開始した。それは自衛隊クーデターの序章でもあった』

吉永貴美子著

『領土回復計画』より抜粋

2018年3月12日

遂に自衛隊がクーデターを決行。首都東京は陸上自衛隊・航空自衛隊が制圧。海上自衛隊は東京湾に停泊、砲の照準を国会議事堂へ向けた。各都道府県に点在する自衛隊基地からも、庁舎を制圧する為に出動した。この事態に大連立政権は何も打つ手が無かった。国内最強の武力を有する自衛隊がクーデターを起こしたのだから当然だろう。

『国会議事堂・首相官邸等々を占領した自衛隊は首相官邸で記者会見を行った。会見は陸海空幕僚長と統合幕僚長の4人で行われた。

統合幕僚長はまずクーデター決行理由を語ると、3つの宣言を行った。1つは憲法停止であった。憲法を停止し、日本人の手で作直すとは統合幕僚長は言った。2つ目は自衛隊の軍昇格であった。本来の有るべき姿に自衛隊を戻すと言うのである。そして最後に国会議員を全員クビにする。この3つを宣言した。最後の国会議員を全員クビにする、これを行うことで国政に大きな穴が空く。此れに対処する為、半年間は軍事政権を樹立すると統合幕僚長は宣言した。かつてエジプト軍が行った期限付きの軍事政権を再現したのである。』

岡宮椿著

『自衛隊クーデター』より抜粋

2018年9月20日

政権は新しく誕生した『日本政治指導会』へと引き継がれ、政党政治は完全に廃止された。新政権の目標は尖閣諸島と琉球列島の奪還であった。

未知との遭遇（前書き）

皆様お久し振りで。

ちよくちよく更新を再開していきます。

未知との遭遇

2018年9月20日午後11時

日本首都東京永田町首相官邸2階閣議室

広い閣議室の中央に置かれた円卓を囲むように閣僚達が座っていた。皇居での認証式を終え初めての閣議が開かれたのである。その新閣僚達を率いこの国の新しい指導者そして初の女性総理となった、柏木麗子はゆっくりと話し始めた。

「皆さん。私はこの国の現状を非常に憂いております。この事態に陥った元凶は排除し、裁判に掛けました。後は失われた国土を奪還し、叶うのなら同胞である東亜細亜諸国も解放しなければなりません。」

柏木総理の言葉に閣僚達は驚いた。尖閣諸島・沖縄を奪還出来ればそれで良いと思っていた。否、今の日本軍ではそれしか出来ないだろう。期待の空母はようやく船体が完成したにすぎない。しかも蒸気カタパルトを輸出してくれると約束してくれていたアメリカはクレア大統領が輸出を拒否した。その為日本の空母復活という野望は躓いている。それにも関わらず柏木総理は東亜細亜諸国を解放すると言っているのである。閣僚を代表して官房長官の大河内耕助が質問した。

「しかし総理、我が軍に尖閣諸島・沖縄を奪還した後には東亜細亜諸国を解放出来る余力があるかどうか。それに期待の空母もアメリカがカタパルトを輸出拒否を決めた為、建造は頓挫しています。尖閣

諸島・沖縄奪還本土からの航空支援を受けられますが、東亜細亜諸国解放には空母の航空支援が欠かせません。東亜細亜諸国解放は難しいです。」

大河内官房長官の言葉に他の閣僚も頷いた。

「私もそう思います。大中華帝國の海軍は空母4隻を有し強大な戦力を有します。特に空母鎮遠級は満載排水量7万3000トンを誇り、イギリス海軍のクイーンエリザベスやロシア海軍のアドミラルクズネツォフ等々を凌ぎ、空母保有国の中では、アメリカ海軍のジェラルド・R・フォードそしてフランス海軍のリシュリーに次いで巨艦です。更に空母経遠級も満載排水量6万トンを誇ります。我が国が建造中の空母と同規模です。それだけでなく、空軍戦力についても我が国とは桁違いに離れています。第5世代戦闘機J-20は現在約800機が作戦配備されています。このJ-20はアメリカ空軍のF-22やロシア空軍のT-50よりやや、性能は低いですが数で第5世代戦闘機最大の勢力を誇っています。そして陸軍も99改式戦車を筆頭に機甲車輛を揃え、強大な機甲師団を形成しています。それだけで無く特殊部隊も精強を誇っています。今や大中華帝國は亜細亜で強大な軍事大国と言っても過言では無いでしょう。」

森下朱美国防大臣が柏木総理に説得するように言った。他の閣僚も柏木総理を説得しようと口を開こうとした。しかしそれを柏木総理は手で制しゆっくりと、だがはっきりと断言した。

「皆さん、大丈夫です。私達は勝てます。尖閣諸島・沖縄を奪還して東亜細亜諸国を解放するだけで無く、大中華帝國を崩壊させる事が出来ます。」

閣僚達は唾然とした。柏木総理は頭が狂っている。こんな人が総理になったなんて最悪だ。閣僚達は呆れ果ててしまった。大河内官房長官が勇気を振り絞って、柏木総理に尋ねた。

「あの……総理……」

「待ってちょうだい。」

大河内官房長官の言葉も柏木総理は手で制し、再び話し始めた。閣僚達の顔に諦めの表情が浮かぶ。

その時、森下国防大臣は閣議室の隅が奇妙に歪んで見えるのに気が付いた。それた雑巾を絞るかのように少しずつ歪んでいった。不気味に思った森下国防大臣は右隣の高橋万里江外務大臣に声を掛けた。まだ柏木総理の演説は続いている。

「高橋さん、あの歪み見えますか？」

「歪み？」

高橋外務大臣は森下国防大臣が指指す方向に目を向けた。

「!?!? 何あれ？」

「分かりません。」

「目の錯覚かしら？」

「目の錯覚にしてははつきりしています。」

2人が議論しているとその歪みが消え、その歪んでいた場所から女性を立てていた。

「柏木総理、閣僚の皆さんは貴女を呆れていますよ。」

「あら、やっぱりそうだったの？何だか心此処にあらずって感じだったから。当たってたのね。」

女性は柏木総理と親しそうに話し始めた。その女性は全身真っ黒の服装で髪は腰まで真っ直ぐ伸びていた。目は神秘的でじっと見ていると吸い込まれそうなほど透き通っていた。女性は柏木総理の隣まで歩いてくると立ち止まった。

「皆さん、彼女は宇宙を管理する生命体の管理者黒子さんよ。」

「初めまして。黒子とお呼び下さい。」

柏木総理が紹介すると黒子と紹介された女性は律儀にも頭を下げた。

「宇宙を管理する生命体の管理者！？」

藤咲遥香財務大臣が驚きの声をあげた。他の閣僚達も同様の反応をしている。全く持って今日は驚く事が多い。閣僚の何人かは寿命が確実に縮んだと心の中で叫んでいる事だろう。

「嘘だと思う人もいるでしょうね。私も最初に会った時は当然そう思ったわ。でも嘘じゃなかったの。」

「論より証拠。私が生命体の管理者である証拠を皆さんにお見せしましょう。柏木総理、テレビは見えるでしょうか？」

「勿論よ。」

柏木総理は秘書官に液晶モニターにテレビを映し出すよう命じた。するとニュース番組が始まったところであった。

「今から私が指を鳴らしますのであの男性にご注目を。」

黒子はそう言って注目させると、パチッと指をならした。

「どうなるの？」

高橋外務大臣が呟いた次の瞬間、男性キャスターが口から血を吐いて倒れた。

『どうした！？』

『救急車！！』

『カメラ止めろ！！』

様々な声が飛び交い遂にテレビは、お詫びのテロップが流れ中断された。

閣議室が静寂に包まれる。ただ平然としているのは柏木総理だけである。

「……あのキャスターは？」

静寂を打ち破るように大河内官房長官が黒子に尋ねた。

「お亡くなりになりました。」

「そんな！！犯罪だ！！」

久野雅彦法務大臣が叫んだ。

「証拠はありません。それに皆さんが早く信じていただければ助かりました。可哀想に彼には奥さんと3歳の女の子がいたのに。」

黒子の言葉に閣僚達は黙り込んだ。確かに黒子が生命体の管理者と言われた時に疑ったのは自分達である。しかしいきなり自分は生命体の管理者だ、と言われて信じる人がいるわけが無い。精神障害者だと思ふのが普通だろう。しかし黒子は指を鳴らただけで人を殺した。もはや生命体の管理者と言うのは揺るぎの無い事実だろう。

「部屋の隅から現れ、指を鳴らただけで人を殺した。もはや黒子さんは生命体の管理者で間違い無いでしょう。」

森下国防大臣は全てを受け入れ、落ち着いた表情で言い切った。

「私もそう思います。」

高橋外務大臣も頷きながらそう言った。

「信じるしか無いわね。」

藤咲財務大臣は未だに目を白黒させながらもそう言った。

「現実を受け入れるしかないです。」

大河内官房長官も水を飲みながら言った。他の閣僚も黒子を生命体の管理者と認めた為、柏木総理と黒子は漸く今回の計画について話す事が出来るようになった。

パラレルワールド（前書き）

私は現在入院しております。訓練中に少々ヘマをしまして……

姫路の国立病院に2週間入院し、川西の自衛隊阪神病院に現在入院しております。

私も色々考えましたが、自衛隊を辞めようと思います。元海軍軍人の祖父の意志を継いで自衛隊に入りましたが、自分の精神力・体力ではこのまま自衛隊を続けていけば同期や上官方の足を引っ張るだけだと考えました。

確かに自衛隊は生半可なものでは無いと覚悟していました。しかしこれ以上は迷惑だと思い、自らが身を引く事を決断しました。

母親も言っていました。辞めてどうなるか解りません。このご時世再就職出来るかも解りません。しかしそれでも自分の新しい方向に、自分の何か他の可能性に賭けてみようと思います。

此れからの事は解りませんが、自分を信じて頑張って行きたいと思っています。

こんな人間が書く小説ですが今後とも、よろしく願います。

パラレルワールド

「今回の件については黒子さんに詳細をしてもらおうわ。黒子さん、お願い。」

「解りました。」

柏木総理に任せられ、黒子は液晶モニターの前に立った。

「それではご説明いたします。私はこの銀河のこの地球のこの日本の危機に深く同情します。」

黒子はそう言うのと頭を深々と下げた。

「……まあ、心配してくれてありがとう。」

森下国防大臣が礼を言った。

「そこで私は皆さんを支援する為、大日本帝國海軍連合艦隊をタイムスリップさせて出現させます。」

「タイムスリップ!？」

閣議室が騒然とした。生命体の管理者はタイムスリップまで言い出したのだ。

「それは有り難いです。しかし大東亜戦争時の連合艦隊を派遣されても、改装が必要でしかも大中華帝国の空母に対抗出来るかどうか……」

「藤咲さん、大東亜戦争時ではありません。」

柏木総理は藤咲財務大臣の疑問に含みを持って答えた。

「大東亜戦争時ではない？　どういう事ですか？」

大河内官房長官が柏木総理に聞いた。

「そのままですよ。タイムスリップしてくるのは大東亜戦争時の大日本帝國海軍連合艦隊ではなく、2030年の大日本帝國海軍連合艦隊なのよ。」

「2030年!？」

再び閣議室が騒然とした。今から12年未来の世界である。しかし今以て祖国は『日本国』であり、帝國主義はとっくの昔に廃れたものである。しかし黒子のはつきりと2030年の大日本帝國海軍連合艦隊だと言った。いったいどうなっているのか？

「皆さんの混乱は解ります。しかしご心配無く。この国が12年後に大日本帝國になるわけではありません。別次元の世界に存在する大日本帝國です。其処に救援を仰ぎます。言うなればこれは、次元を超えた救出作戦です。」

黒子の言葉に閣僚達……柏木総理を除いて……は呆然としていた。話の規模が大きすぎる。未来の連合艦隊をタイムスリップさせて大中華帝國を叩き潰すのを手伝ってもらうのである。しかも未来となれば原子力空母やイージス艦も保有しているだろう。戦略原潜も当然ながら保有しているので、これなら大中華帝國の核に怯える事は無い。日本は非核三原則を自衛隊クーデター後の国会で破棄している。核兵器開発中でもあるのでそれが一瞬で、一時的ではあるが手に入るのだから喜ばしい限りだ。

「それで、タイムスリップするあっちの大日本帝國は了承しているの？」

高橋外務大臣が黒子に肝心な部分を尋ねた。確かに肝心だ。こっちが助けて欲しいと言っても向こうがイヤと言えどそれ迄だ。

「大丈夫です。その点は救出作戦成功後にあちらの大日本帝國軍の近代化を私が援助しますのです。」

「対価は十分ってわけ。向こうにとってこっちを助ける意味はあるわ。」

柏木総理は閣僚達を見回しながら言った。

「そしてこれからが大事な。未来の、それも別次元の大日本帝國に助けて貰うわけだけど、我が日本政府として正式に要請しなければならぬ。だから閣議で聞きたいわ。反対は無いわね？」

「はい。」

誰も反対する訳が無い。未来の大日本帝國に助けて貰い、占領された国土と東亜細亜諸国を解放出来ればそれに越したことはない。日本に点在する東亜細亜各国の亡命政権が、この閣議決定を聞けば涙を流し感謝するだろう。

「黒子さん、無事閣議決定したわ。連合艦隊タイムスリップの時期は何時になるのかしら？」

「閣議決定おめでとうございます。タイムスリップは早いほうが良いでしょうから、明日の正午はどうでしょうか？」

黒子は柏木総理に尋ねた。

「そうですね。」

「場所は四大軍港に分散してタイムスリップしてきますので、その点は注意して下さい。」

「漁船やタンカー・輸送船は海上保安庁に頼みます。」

「お任せ下さい。」

川村幸人国土交通大臣が自信有りげに答えた。

「さてタイムスリップ件は片付いたので、支援してくれる未来の大日本帝國の発展の歴史について説明しましょう。」

黒子はというと液晶モニターに映像を出した。電源が入っていないのに映像が流れた所を見ると、これも黒子の力の1つなのだろう。映像には大都市が映し出されていた。

「ご覧の映像は未来の大日本帝國連邦中央州中京都帝都名古屋です。」

「連邦！？名古屋！？」

久野法務大臣が叫んだ。他の閣僚達も驚いている。

「詳しく話しましょう。先ほと言いましたように正式には大日本帝國連邦となります。領土は日本列島に留まらず、シベリア地方・中国大陸・東南亜細亜諸国・オーストラリア大陸・南洋諸島全てが大日本帝國連邦領です。」

映像は世界地図に切り替わり今黒子が言った場所は、大日本帝國連邦領を示す青色に染まった。

「何故此れ程までの規模に？」

藤咲財務大臣が質問した。

「全て織田信長が原因です。」

「織田信長！？奴は本能寺の変で死んだんじゃ？」

黒子の言葉に大河内官房長官が噛み付いた。

「死ななかったのです。それが原因で日本はここまで拡大しました。織田信長はたった1代で大日本帝國連邦の骨格を築いたのです。」

「骨格？」

「はい。2代目の濃女帝が大日本帝國連邦を完成させます。濃女帝とは織田信長の妻濃姫です。」

高橋外務大臣の質問に黒子は答えた。

「それから産業革命を大日本帝國連邦は成し遂げ驚異的な発展を遂げます。そして第一次世界大戦・第二次世界大戦・等々の数多くの戦争を乗り越え、大日本帝國連邦は2030年の東西冷戦を迎えています。」

「東西冷戦！？」

閣議室は驚きに包まれた。

「敵は？」

「大日本帝國連邦と大英帝国の冷戦です。」

「大英帝国と!？」

川村国土交通大臣は驚きのあまり椅子から転げ落ちた。

「つまりその大英帝国との冷戦に勝利する為に私達を助けてくれるの。過去の大中華帝国を叩き潰して軍備増強出来れば安いもんでしょ？」

柏木総理は閣僚達の顔を見回しながら言った。

「そう言う事です。では私はあちらの大日本帝國連邦に派遣兵力やその方法について協議がありますのでこれで。」

黒子はそう言うのと閣議室の隅に歩いて行った。しかしそこで振り返った。

「私を呼びたい時は強く念じて下さい。では。」

黒子はそう言うのと歪みが再び出現し、その中へ入って行った。歪みは黒子が入ると何も無かったように消えた。

「では皆さん、タイムスリップしてくる大日本帝國連邦海軍連合艦隊を待つまで、大中華帝国の対応を協議しなければなりません。忙しくなりますよ。」

柏木総理はそう言うのと閣僚達を再び閣議に引き込んだ。敵は直ぐ其処まで攻めて来ているのである。のんびりしてはいられない。

時空超越派遣軍

2018年10月1日午前9時59分

神奈川県横須賀市横須賀基地上空

新生日本海軍連合艦隊の母港となっている横須賀基地は静粛に包まれていた。配備されている第1打撃艦隊（旧第1護衛隊群）は出港して、タイムスリップに巻き込まれないようにして待機していた。これは横須賀に限ったの事では無く、呉・舞鶴・佐世保でも同じような事が行われていた。海軍艦艇に限らず漁船からタンカー・輸送船全てが、海上保安庁の巡視船の先導で待避していた。

黒子の話によるとあちらの世界の大日本帝國連邦は海軍連合艦隊の全てをタイムスリップさせるとの事であった。それだけに留まらず、陸軍・空軍・揚陸隊もタイムスリップさせる大盤振る舞いとなった。揚陸隊は海軍連合艦隊の強襲揚陸艦に搭載してのタイムスリップなので問題ないが、陸軍・空軍のタイムスリップも行われる為、全国の陸軍基地・空軍基地も出来る限りのスペース造りに励んだ。それでも足りない為、旧在日米軍基地もタイムスリップ地点に選ばれた。それら全てが国民には極秘で行われていたが、今日のタイムスリップを目撃してもらおうと柏木総理が記者会見で公表した為、横須賀基地のみならず全国の日本軍基地にテレビ局が押し掛けていた。

UH-60JA機内

「総理、約束の時間まで後1分です。」

大河内官房長官の言葉に柏木総理は黙って頷いた。正直言って柏木総理は不安であった。黒子の言うように本当に別の世界の大日本帝國連邦軍がタイムスリップしてくるのかは分らない。黒子を閣僚に合わせ奪還作戦を決定させたあの日、その次の日から柏木総理は国内に点在する東南亜細亞諸国の亡命政府に奪還作戦を伝えるに言った。黒子にも登場してもらい、亡命政府関係者は涙を流しながら柏木総理に礼を述べた。韓国亡命政府も此迄の反日活動に謝罪し、祖国奪還を涙ながらに感謝した。亡命政府にとって日本が最後の希望であり、その日本に別の世界の大日本帝國連邦軍がタイムスリップして協力してくれる事実には、ただただ感謝の意を述べるしか無かった。各国の国軍は大中華帝國の侵攻時に果敢に反撃を行い、全滅している。国軍無き亡命政府は協力して奪還作戦に参加出来ない事を口々に謝った。しかし無い袖は振れない。柏木総理もそれは仕方ない事だと言い、日本軍と大日本帝國連邦軍での奪還作戦を明言した。その希望とも言える大日本帝國連邦軍がもうすぐタイムスリップしてくる。柏木総理は頭を大きく振り、不安を払拭しようとした。彼女黒子を信用出来なければ、日本は大中華帝國に併合されてしまう。今は黒子を信じるしかない。

「!?! 総理!?! 海面を!?!」

パイロットの声に柏木総理は、窓際に近づいた。柏木総理、実は高所恐怖症であるが今はそんな事は言ってられない。海面を垣間見た柏木総理の目は、明らかな異変を捉えた。

「……これは、一体。」

大河内官房長官は震える口を開きながら呟いた。

海面には白い霧のような物が立ち込め、東京湾一帯を包み込んでいた。ドックや港湾設備も例外では無く、あちらの大日本帝國連邦海軍連合艦隊を受け入れ為のものと想われた。

その永遠とも感じる時間が過ぎると、海面には見たこともない軍艦が停泊していた。

「そ、総理。」

「ええ。……これは凄いわ。」

大河内官房長官の言葉に柏木総理は声を振り絞りながら答えた。

眼下に君臨する巨艦の獐猛達は威風堂々としており、まさに海の覇者といった風格を漂わせていた。空母だけでも4隻は停泊しており、巡洋艦・駆逐艦も大量に停泊していた。そして何より目を引いたのが。

「総理！！あれは戦艦です！！」

大河内官房長官は興奮したように叫んだ。

柏木総理は瞬きしてその巨艦を見つめた。

3連装の主砲が前後に2基ごと配備され、一際目立つ風格を漂わせていた。柏木総理は昔読んだ本の内容を思い出した。

現代に大和を復活させればそれはまさに不沈戦艦として復活出来る。そう書かれていた。対艦ミサイルでは戦艦の分厚い装甲を破壊する事は出来ないと言うのである。ともすれば世界各国の保有する軍艦

の主砲はまさに豆鉄砲でしかなく、大和は傷一つつかないと言うのである。

それを別の世界の大日本帝國連邦は成し遂げたのである。しかも未来世界である為、何かしらの新装備を備え不沈戦艦を実現しているかもしれない。

「艦首をご覧ください！！」

パイロットの声に2人は艦首に目を向けた。

「あれは！！」

「織田帝國って事ね。」

艦首には菊花紋章ではなく織田木瓜が颯爽と輝いていた。

「連絡です。呉・佐世保・舞鶴のみならず、全国の陸軍空軍基地でタイムスリップを確認したとの事です。」

「これで日本は救われた。」

パイロットの言葉に柏木総理は安堵の溜め息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5128n/>

自衛隊クーデター～新生日本の聖戦～

2011年9月27日07時59分発行